



「あまおう」3月の管理

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

生育状況

早期作型では、2番果房は2月上旬から収穫が始まり、2月20日頃収穫のピークとなりました。1・2番果房が連続したところでは、2月下旬には2番果房の3～5果目が収穫され、早いところでは、2番果房の収穫が終了したところもありました。普通作型で1・2番果房が連続したところでは、1月下旬から収穫が開始され、2月10日頃ピークを迎え、現在、ほぼ収穫が終了しています。3番果房は、2月上旬に出蕾～開花、2月下旬で人差指大～親指大となっています。

草勢は例年よりやや弱く、低温管理したり早進株で着果負担の大きかったところでは矮化状態の株が見られます。

病害虫の発生状況

うどんこ病は、例年より少ない状態ですが、一部で散見されています。ハダニ類は、天敵利用の有無にかかわらず、下葉に発生が見られます。また、アザミウマ類（スリップス）及びアブラムシ類の発生が多くなっており、今後の注意が必要です。

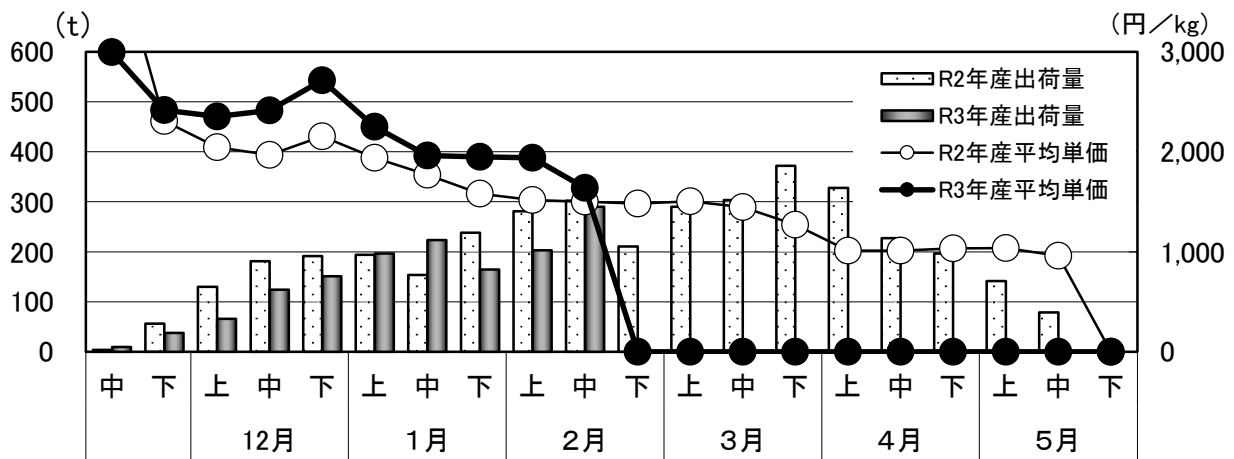


図1 JA福岡大城いちご部会出荷実績

気象予報と今後の見通し

【今後の気象予報】

〔九州北部地方の1か月予報〕（予報期間：2月26日～3月25日 2月24日 福岡管区气象台発表）

- ・ 向こう1か月間の気温は、ほぼ平年並みでしょう。
- ・ 向こう1か月の降水量、日照時間もほぼ平年並でしょう。

平均気温	低い 30	平年並 30	高い 40
降水量	少ない 40	平年並 30	多い 30
日照時間	少ない 30	平年並 30	多い 40

図2 九州北部地方における向こう1か月間の天候の見通し

週別の天候・平均気温

	2/26~3/4	3/5~11	3/12~25
天候	天気は数日の周期で変わ るでしょう。	天気は数日の周期で変わ りますが、高気圧に覆われ やすく、平年に比べ晴れの 日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わ るでしょう。
平均気温	平年並 の見込み	平年並 の見込み	ほぼ平年並 の見込み

向こう1か月間の気象は、ほぼ平年並みと見込まれていますが、例年この時期は、うどんこ病やハダニ類が急増する時期です。予防散布の徹底を心がけ、気象予報に留意して、多発しやすい条件が予想される場合には早めに対策を講じてください。

3月の管理目標

- ・電照の終了を適期に行う。
- ・果実の傷みや軟果を防ぐため、日中は谷やハウスサイドを開放し、ハウス内温度を低く抑える。
- ・うどんこ病、ハダニ類、アザミウマ類(スリップス)及びアブラムシ類が急増する時期なので、定期的な薬剤散布を行う。
- ・育苗期の炭疽病発生を抑えるために、3月上旬に専用親株の防除を開始し、その後は定期的に薬剤散布を行う。

1 温度管理

- ・日中は、サイド・谷・妻面を開放して換気を行い、低めの温度管理を行う。
- ・夜温7℃以上の日は、夜間もハウスを開放したままにする（雨天日を除く）。

表1 3月以降の温度管理の目安

午前	午後	夜間
18℃~20℃	18℃以下	5℃（夜温7℃以上は開放）

2 電照管理

- ・草勢を見ながら徐々に電照時間を短くし、3月中下旬を目安に心葉の展開が外葉より高くなりかけたら終了する。
- ・着果負担が大きく、心葉の伸びが悪い場合は、電照時間はそのまましばらく生育状況を観察し、心葉が伸びてきたら電照時間を短くしていく。
- ・電照終了後、心葉の伸びが悪くなった場合や、展葉速度が極端に遅くなった場合は、電照を再開する（2時間程度）。

3 かん水

- ・2月下旬くらいから吸水量が増加するので、かん水は少量で回数を多く行う（1回当たりのかん水量が多いと、収穫時の果実傷みの原因となるため）。
- ・かん水の目安は、pF値1.7~1.8とする（朝、葉つゆをうたないようであれば土壌が乾燥している）。

- 果実品質維持のため、収穫直後にかん水する。
- 水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるハダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

4 施肥

- 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10a程度を数回に分けて施用する。
- 収穫終了1か月前を目安に施肥を終了する。

5 株整理と玉出し

- 収穫が終了した果梗を早めに除去すると展葉が早くなるので、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- 枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。
- 果実品質向上のため、随時、玉出しを行う。

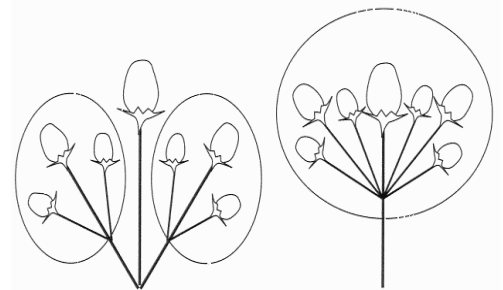
6 摘果

3番果房の摘果は、果梗の形に応じて行う。また、草勢が弱い場合（心葉の葉柄長9cm以下）は着果数を減らす。

4番果房の摘果も同様に行う。

【1枝当たりの着果数目安】

通常果梗	：	3果/枝
かんざし果梗	：	4～6果/枝



通常果梗

かんざし果梗

図3 果梗の形に応じた摘果

7 炭酸ガス施用

- 換気が頻繁にされるようになると、炭酸ガス施用の効果が小さくなる。
- 日中ハウスを開放する時期（3月中下旬）を目安に施用を終了する。

8 病虫害防除

(1) 灰色かび病

- 多湿条件で発生が増加するため、曇雨天の前などは予防的な薬剤散布を行う。
- 過湿を防ぐため、降雨や「春一番」が吹く前日は、かん水を行わない。
- 発病果は見つけしだい取り除きハウス外に持ち出すとともに、その後の薬剤防除を徹底する。

(2) うどんこ病

- 夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- 電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防に努める。
- 発病葉や発病果は見つけしだいハウス外に持ち出す。
- 本病菌は空気感染するので、風で孢子が飛散しないよう換気に注意する。（風が強い日にはサイドを開けない）
- 葉裏に薬液がよく付着させるため噴霧ノズルから細かな霧が出るように、古いノズルは取り替える。

(3) ハダニ類

- 下葉除去後、葉裏に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ハダニ類の多発した株は、株ごと除去するか、強めに葉かぎした後に続けて2回以上防除をする。
- ハダニ類は下葉に多く寄生しているので、葉かぎしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。ただし、天敵を利用している場合には、下葉についた天敵を有効に利用するため、葉かぎした葉は通路等に置いておく。
- カブリダニ等天敵を利用している場合は、天敵に影響のないダニ剤を使用する。

(4) アザミウマ類 (スリップス)

- 多発してからでは被害を防ぐことが困難となるので、発生を確認したら速やかに防除する。
- 幼果に褐変がほ場内でわずかでも見られる場合は、直ちに防除が必要である。
- 多発時には、薬剤がかからない卵や蛹（土中に生息）が混在し、防除が難しくなる。IGR剤の散布から約5日後に、成虫にも効果の高い薬剤を追加散布することで、高い防除効果が得られる。
- ハウスの換気量が増大する時期になると、ハウス外から大量に成虫が飛び込んで来るので、成虫にも効果の高い薬剤を散布する。
- ほ場周辺の雑草除去を行う。
- 薬剤は、ミツバチや天敵への影響が大きいものもあるので、事前に影響を調べたうえで使用する。

(5) アブラムシ類

- アブラムシ類の発生が多くなっており、今後の気温上昇で急増しないよう、定期的な防除を行う。
- 新葉、花蕾などに寄生することが多いので、寄生部位に薬液が十分付着するよう、薬剤散布を行う。

★ 農薬散布上の注意

薬剤の効果を高めるには、葉裏に十分付着するように散布することが必要である。

- 葉裏や下葉にも薬液がかかるように丁寧に散布する。
- 噴霧ノズルから細かな霧が出るように、ノズルが古くなっている場合には取り替える。

9 専用親株の管理

- 不要な下葉や花蕾を除去する。
- 土壌の乾燥により生育が遅れると、ランナーの発生数が減少するので土壌が乾かないようにかん水する。プランターやポットは乾燥しやすいので、こまめにかん水する。
- 肥料切れしないように追肥する。(施肥例 3月中旬に「花むすめ」5粒/株程度)
地植えでは、マルチを破って「花むすめ」を株当たり5粒程度施用する。
- 定期的に炭疽病やハダニ類の防除を行う。

トピックス

イチゴは多くの土壌水分を必要とする pFメータを活用したかん水管理の改善

1 pF値とは

本資料の **3 かん水** の項では、かん水の目安をpF値で示しています。pF値とは土壌水分の状態を表すもので、水分が少ないほど高く、多いほど低くなります。

2 イチゴは、多くの土壌水分を必要とする

かん水の目安となるpF値1.7~1.8はかなり土壌が湿った状態です。イチゴはトマトやキュウリに比べてかん水開始時期のpF値が低く（表2）、土壌水分が多い状態で管理する必要があります。

3 3月になるとイチゴの吸水量が1~2月に比べてかなり大きくなる

2月下旬以降になると、イチゴの吸水量が急に多くなります（図4）。3月になるとさらに吸水量が多くなり、十分な水を供給するために、かん水量を増やす（かん水間隔を短くする）ことが必要です。

表2 施設内作物の灌水開始時期の水分吸引圧（五島）

作物名	灌水開始時期のpF値(深さ10cm)
イチゴ	pF 1.5~2.0
トマト(生育後期)	pF 1.8~2.3
キュウリ(生育後期)	pF 1.7~2.3

（「土壌の物理性と植物生育 土壌物理研究会編 1979年（株）養賢堂発行」より引用作表）

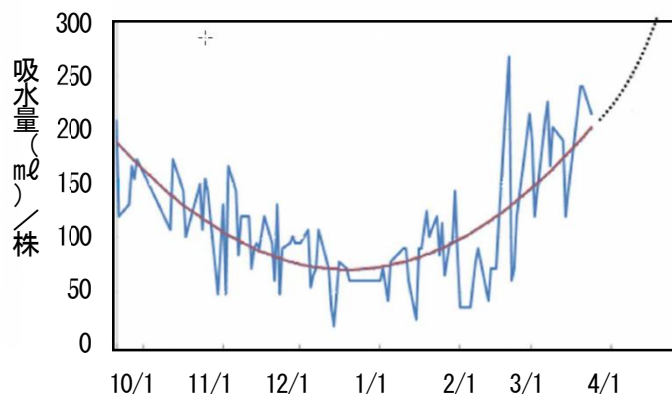


図4 イチゴの時期別吸水量（「さがほのか」の事例）
（大分農林水産研究指導センターの資料から）

4 pFメータを利用すると土壌水分状態を把握することができる

土壌水分は、pFメータ（写真1）を用いて知ることができます。図5は、2月下旬の晴天日にイチゴほ場（JA福岡大城管内）のpF値の変化を示したものです。午後には、午前中に比べてpF値がかなり高くなり、土壌水分が少なくなっていました。このことは、イチゴが多くの水を吸ったことを示しています。吸水量が増える3月以降は、さらに変動が大きくなると思われます。

pFメータを利用すると1日の土壌水分の変化もわかり、イチゴの吸水状況も知ることができます。あなたもpFメータを活用してみませんか。



写真1 イチゴハウスに設置されたpFメータ

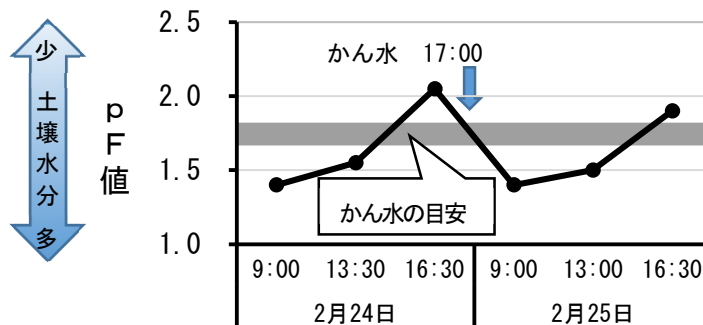


図5 イチゴハウスにおけるpF値の変化事例
（令和4年2月24~25日 晴天日）

農薬の適正使用を徹底しましょう

— 専用親株への農薬散布に当たっては、隣接ほ場への飛散防止に心がける —

ハウス内の農薬散布では、ハウス外の作物に農薬が飛散することはほとんどありません。しかし、親株に農薬を散布する場合には、風向きや散布のしかたによっては、親株床に隣接したほ場の作物に薬液が飛散するおそれがあります。

以下のことに注意して農薬の飛散防止を心がけてください。

- 1 農薬散布は、無風又は風が弱いときなど、隣接したほ場に飛散しにくい天候・時間帯に行う。
また、風下側に作物がある場合には散布を避ける。
- 2 散布の方向やノズルの位置に注意する。
○ほ場の外側から内側に向かって散布する
○できる限りノズルを親株に近づけて散布する（このように散布すると下葉やクラウン部にも薬液がよく届く）
- 3 散布圧力を高くしたり、散布量を多くし過ぎると飛散しやすくなるので適正な散布圧力・散布量で散布する。
- 4 飛散低減ノズルや飛散防止カバー（写真2）を利用して飛散を防ぐ。



(通常ノズル)



(飛散低減ノズル)



(飛散防止カバー)

写真2 飛散防止対策の例（出典：農薬流出防止技術の紹介（環境省））

ラベルをよく読み、使用基準を遵守しましょう

農薬のラベルには使用基準が明記されています。必ず基準を守ってください。もし、使い方を誤ると、使用した本人だけではなく産地全体が重大な損害を被ることがあります。

目的とする病害虫に合っているか確認しましょう。	これより多い回数使用してはいけません。育苗期、本ほごとに回数が決まっているものもあるので注意してください。	薬剤の使用回数だけではなく、薬剤成分ごとの使用回数を超えないように注意しなければなりません。
イチゴに使用できる農薬であるか確認しましょう。	これより濃い濃度で使用してはいけません。	使用方法が定められています。常温煙霧機で使用できる農薬は、この欄に「常温煙霧」と表示されている薬剤のみです。
	これより多く使用してはいけません。	
	定められた時期以外に使用してはいけません。	

作物名	適用病害名	希釈倍数(倍)	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	●●●●を含む農薬の総使用回数
いちご	〇〇〇	2000	100~300ℓ/10a	収穫前日まで	3回以内	散布	4回以内

本資料中の農薬に関する記述は、令和4年3月1日現在の登録内容に基づいています。